

論文

be 動詞に続く不定詞関係節 *

Infinitival Relative Clauses Following *be*

西前 明

SAIZEN Akira

抄録：

不定詞関係節には、be動詞に後続できるものとできないものがある。本稿は、be動詞に後続できるかどうかは不定詞関係節の解釈によって決まると主張する。すなわち、不定詞関係節には、法的意味(必然性・可能性・予定など)を表す法的不定詞関係節と非法的意味(物の使用目的)を表す非法的不定詞関係節があり、前者はbe動詞に後続できるが、後者はできないと述べる。ここで、法的不定詞関係節のtoは法助動詞であり、非法的不定詞関係節のtoは非法助動詞であると仮定すると、法的不定詞関係節がbe動詞に後続できないのは、法助動詞のtoが助動詞のbeに後続できないからであると述べることができる。法助動詞が他の助動詞に後続できないのはよく知られた事実である。

キーワード：不定詞関係節、(非)法的解釈、be動詞、(法)助動詞

1. はじめに

(1)は不定詞関係節の例である。(2)は、(1)の不定詞節をbe動詞に続く位置に置いたものである。

(1) the fork [to eat olives with]

(2) The fork is [to eat olives with].

本稿は(2)の不定詞節を関係節とみなす。その根拠として、前置詞の目的語の省略を指摘したい。(3)で示す通り、前置詞の目的語を単純に省略することはできないが、定形関係節(および不定詞関係節)においては、(4)で示す通り、前置詞の目的語の省略が可能である。したがって、前置詞の目的語の省略は、関係節の特徴と言える¹⁾。

(3) I ate olives with *(the fork).

(4) the fork [you eat olives with]

本稿のインフォーマントによると、不定詞関係節には、be動詞に後続できるものとできないものがある。(5)のような例は文法的であるが、(6)のような例は非文法的である。

(5) a. The fork is [to eat olives with].

b. The curtain is [to block sunlight with].

c. The sofa is [to sleep on].

d. Is that cake [to eat] or just [to look at]?

e. This book is [to show], not [to read].

(6) a. *The fork is [to sterilize].

b. *The curtain is [to wash].

c. *The sofa is [to mend].

(5)と(6)で見られる対立は(7)と(8)では生じない。(7)・(8)は不定詞関係節が先

行詞を直接修飾する例である。

- (7) a. the fork [to eat olives with]
 b. the curtain [to block sunlight with]
 c. the sofa [to sleep on]
 d. Is that the cake [to eat] or the one just [to look at]?
 e. This is the book [to show], not the one [to read].
- (8) a. the fork [to sterilize]
 b. the curtain [to wash]
 c. the sofa [to mend]

本稿の目的は、(5)と(6)の対立、すなわち、不定詞関係節がbe動詞に後続できるかどうかは、その解釈によって決まると主張することである。

本稿の構成は以下の通りである。2節で、不定詞関係節の法的解釈と非法的解釈について述べる。3節で、be動詞に後続する不定詞関係節の解釈について述べる。4節で、不定詞関係節がbe動詞に後続できない例の非文法性を説明する。

2. 不定詞関係節の解釈

Quirk *et al.* (1985: 1269) は、先行詞を意味上の目的語とする不定詞関係節は常に法的解釈 (例えば should) になる、と述べている (Geisler (1995: 74-77) も参照)。しかしこの主張は正しくない。(9)と(10)は共に先行詞を意味上の目的語とする不定詞関係節の例である。本稿のインフォーマントによると、(9)は、法助動詞を含まない定形関係節を用いて、(11)のように言い換えることはできないが、(10)は(12)のように言い換えることができる。(9)は、法助動詞を含む定形関係節を用いて、(13)のように言い換えることはできるが、(9)と(11)は意味が異なる。すなわち、(9)の不定詞関係節には法的解釈((13))しかないが、(10)の不定詞関係節には非法的解釈((12))がある²⁾。

- (9) the fork [to sterilize]
 (10) the fork [to eat olives with]

(11) the fork [that you sterilize]

(12) the fork [that you eat olives with]

(13) the fork [that you should sterilize]

(10)の非法的解釈の不定詞関係節は、物の使用目的を表す前置詞句 for -ing (Swan (2016: entry 468)を参照)を用いて、(14)のように言い換えることができる³⁾。すなわち、(10)の不定詞関係節は物の使用目的の解釈が可能である。(9)の不定詞関係節は、for -ingを用いて、(15)のように言い換えることはできない。(16)と(17)でそれぞれ示す通り、(7b-e)と(8b, c)についても同様である。

(14) the fork [for eating olives with]

(15) *the fork [for sterilizing]

(16) a. the curtain [for blocking sunlight with]

b. the sofa [for sleeping on]

c. Is that the cake [for eating] or the one just [for looking at]?

d. This is the book [for showing], not the one [for reading].

(17) a. *the curtain [for washing]

b. *the sofa [for mending]

本稿は(18)を主張する⁴⁾。

(18) 不定詞関係節には、法的意味(必然性・可能性・予定など)を表す法的不定詞関係節と非法的意味(物の使用目的)を表す非法的不定詞関係節がある。

法的不定詞関係節は、法助動詞を用いた定形関係節に言い換えることができる((9)→(13))。(物の使用目的を表す)非法的不定詞関係節は、法助動詞を用いない定形関係節((10)→(12))、および、for -ing((10)→(14))に言い換えることができる⁵⁾。

3. be動詞に後続する不定詞関係節の解釈

1節で見た、(19)=(5))の例は、for -ingを用いて、(20)のように言い換えるこ

とができる。ゆえに、(19)の不定詞関係節は非法的意味を表す⁶⁾。

- (19) a. The fork is [to eat olives with].
 b. The curtain is [to block sunlight with].
 c. The sofa is [to sleep on].
 d. Is that cake [to eat] or just [to look at]?
 e. This book is [to show], not [to read].
- (20) a. The fork is [for eating olives with].
 b. The curtain is [for blocking sunlight with].
 c. The sofa is [for sleeping on].
 d. Is that cake [for eating] or just [for looking at]? (Swan 2016: entry 468)
 e. This book is [for showing], not [for reading].

(19)の例とは対照的に、(21)=(6)の不定詞関係節に非法的解釈はない。なぜなら、(22)=(8)のように不定詞関係節が先行詞を直接修飾する文法的な構造においても、(23)で示す通り、不定詞関係節をfor -ingに言い換えることはできないからである。

- (21) a. *The fork is [to sterilize].
 b. *The curtain is [to wash].
 c. *The sofa is [to mend].
- (22) a. the fork [to sterilize]
 b. the curtain [to wash]
 c. the sofa [to mend]
- (23) a. *the fork [for sterilizing]
 b. *the curtain [for washing]
 c. *the sofa [for mending]

すなわち、非文法的である(21)の不定詞関係節は法的不定詞関係節であるが、文法的である(19)の不定詞関係節は非法的不定詞関係節である。本稿は(24)を

主張する^{7), 8)}。

(24) 非法的不定詞関係節はbe動詞に後続できるが、法的不定詞関係節は後続できない。

4. 法的不定詞関係節はなぜbe動詞に後続できないのか

(24)で、非法的(nonmodal)意味を表す不定詞関係節は be 動詞に後続できるが、法的(modal)意味を表す不定詞関係節は後続できない、ということを主張した。続いてその理由を考える。まず、(25)を仮定する⁹⁾。

(25) 法的不定詞関係節の to は法助動詞であり、非法的不定詞関係節の to は非法助動詞である。

(24)・(25)に従うと、(26a)=(19a)と(26b)=(21a)の構造は、(27a)と(27b)のようになる。

(26) a. The fork is [to eat olives with].

b. *The fork is [to sterilize].

(27) a. The fork is [to(=nonmodal) eat olives with].

b. *The fork is [to(=modal) sterilize].

(27)を仮定すると、不定詞関係節は、toが非法助動詞である場合はbe動詞に後続できるが、toが法助動詞である場合は後続できない、ということになる。

ここで、(27)を(28)と比較してみる。

(28) a. *They might should sterilize the fork.

b. *They will can sterilize the fork.

(28)では、法助動詞のshould/canが他の助動詞might/willに後続している。法助動詞が他の助動詞に後続しないのはよく知られた事実である。

(29) 法助動詞は他の助動詞に後続しない。

(28) の should/can と同じく、(27b) の法助動詞の to も助動詞 is に後続している¹⁰⁾。本稿は、(27b) の非文法性を、(28) の非文法性と同様に、(29) の違反としてとらえることを提案する。

(30) 法的不定詞関係節がbe動詞に後続できないのは、法助動詞の to が助動詞の be に後続できないからである。

(27b) と対照的に、(27a) と (31) は (29) に違反しない。(31) は不定詞関係節が先行詞を直接修飾する形である。

(31) the fork [to(=modal) sterilize]

(27b) のように法的不定詞関係節がbe動詞に続くと、「助動詞 (be)+ 法助動詞 (to)」という許されない連鎖ができるが、(27a) のように非法的不定詞関係節がbe動詞に続く場合、および、(31) のように法的不定詞関係節が先行詞を直接修飾する場合は、そのような連鎖は生じない。ゆえに文法的であると述べることができる。

(27a) と (27b) の対立、および、(27b) と (31) の対立を、(29) の制約でとらえようとするれば、(32) のような例が問題になる。(27b) は非文法的であるが、(32) は文法的である。

(32) The fork is [to be sterilized].

(32) では、受動態の不定詞がbe動詞に続いている。すなわち、(27) では、主語が不定詞節の意味上の目的語になっているが、(32) では、意味上の主語になっている。ゆえに、(32) は、予定・義務などの法的意味を表す、いわゆる be to 不定詞構文であると思われる (Quirk *et al.* (1985: 143), Swan (2016: entry 468) を参照)。(32) は、法助動詞を用いて (33) のように言い換えることができる。(34)

は類例である。

(33) The fork should be sterilized.

(34) a. The prisoner is to be handed over to the civil authorities for trial.

(Quirk *et al.* 1985: 218)

b. This cover is not to be removed.

(Swan 2016: entry 42)

be to不定詞構文において、(29)の違反は起こらないのか。be to不定詞構文の構造を(35)のように仮定すると、そのような違反は起こらない。

(35) The fork is(=modal) [to(=nonmodal) be sterilized].

(35)において、法的意味を担う法助動詞はisであり、toは非法助動詞である(McCawley (1988: 250)を参照)¹¹⁾。(35)のtoが(27a)のtoと同じく非法助動詞であるとするれば、他の助動詞に続いて問題はない。ゆえに、(29)の違反は起こらない。

be to不定詞構文のbeが法助動詞である証拠として、(36)と(37)の対立をあげることができる。

(36) *The fork must be [to be sterilized].

(37) The fork must be [to eat olives with].

(36)は、be to不定詞構文のbeの前に助動詞mustを置いたものであり、(37)は、同じくmustを、物の使用目的を表す非法的不定詞関係節に従えるbeの前に置いたものである。(36)で示す通り、be to不定詞構文のbeは助動詞に後続することができない(Quirk *et al.* (1985: 141)を参照)。(38)は類例である。

(38) a. *The conference will/must be to take place in Athens.

b. *The conference has been to take place in Athens. (Quirk *et al.* 1985: 141)

c. The conference is to take place in Athens. (*ibid.*)

(36) と (37) の be について、(39) と (40) のようにそれぞれ仮定すると、(39) の非文法性は (29) の違反としてとらえることができる：(39) では、法助動詞の be が他の助動詞に続いている。一方、(40) の be は非法助動詞なので、(29) の違反は起こらない。

(39) *The fork must be(=modal) to be sterilized.

(40) The fork must be(=nonmodal) to eat olives with.

以上、この節では、法的不定詞関係節がなぜ be 動詞に後続できないかについて述べたが、(27b) の現象と (28) の現象を同列に論じてよいのか、be to 不定詞構文との関連も含めて、今後さらに議論を深めたい。

5. 結び

本稿は次の四点を主張した。

- (I)(=18) 不定詞関係節には、法的意味(必然性・可能性・予定など)を表す法的不定詞関係節と非法的意味(物の使用目的)を表す非法的不定詞関係節がある。
- (II)(=24) 非法的不定詞関係節は be 動詞に後続できるが、法的不定詞関係節は後続できない。
- (III)(=25) 法的不定詞関係節の to は法助動詞であり、非法的不定詞関係節の to は非法助動詞である。
- (IV)(=30) 法的不定詞関係節が be 動詞に後続できないのは、法助動詞の to が助動詞の be に後続できないからである。

注

*本稿は、日本言語学会第155回大会(2017年11月25・26日、於立命館大学)、および、英語語法文法学会第26回大会(2018年10月20日、於立命館大学)における口頭発表の一部に修正を加えたものである。外池滋生氏、野村忠央氏、

柏野健次氏より貴重なご助言を頂き、また、Charles Laurier氏、Michael Smith氏にインフォーマントとしてご協力頂いた。記して感謝の意を表する。本稿における不備の責任は全て筆者にある。

1) (2)のような例のbe動詞に続く不定詞節を関係節とみなす根拠がさらにある。Ross (1986: 231)によると、例えば、(ib)で見ると、不定詞関係節において、空所(=gap)生成文法で主に用いられる用語)を定形節の中に置くことはできない。(ib)では、that節の中のwithの目的語の位置に空所がある。(i)は、不定詞関係節が先行詞を直接修飾する例であるが、空所の位置に関するこの制限は、(iib)で示す通り、be動詞に続く不定詞節においても確認できる。(ib)と(iib)の平行性は、(2)や(ii)のような例のbe動詞に続く不定詞節が関係節であることの証拠となる。

(i) a. the tool [to demonstrate the gravity effect with ____]

b. *the knife [to demonstrate [that you could easily cut up the onions with ____]]

(ii) a. The tool is [to demonstrate the gravity effect with ____].

b. *The knife is [to demonstrate [that you could easily cut up the onions with ____]].

2) the fork [to eat olives with] には、the fork [that you should eat olives with] のような法的解釈もある。

3) (i)=(14)のfor -ingでも、(ii)=(10)の不定詞関係節と同様に、前置詞の目的語の省略が起きている。ゆえに、for -ingも関係節の一種とみなすことができると思われる。なお、for -ingでは、(iii)のような前置詞を省略した形も可能であるが、(iv)で示す通り、不定詞関係節ではこのような省略は許されない。

(i) the fork [for eating olives with]

(ii) the fork [to eat olives with]

(iii) the fork [for eating olives]

(iv) *the fork [to eat olives]

4) 不定詞関係節が表す法的意味の種類については、Huddleston and Pullum (2002: 1068)、秋山 (2015)を参照。

5) for -ingに言い換えられない、すなわち、物の使用目的を表さない非法的不定詞関係節もある。(ia)を(ii)に言い換えることはできないが、(ia)の不定詞節は法

的不定詞関係節ではない。

(i) a. They were the last guests to arrive. (Quirk *et al.* 1985: 1269)

b. They were the last guests who arrived. (*ibid.*)

(ii) *They were the last guests for arriving.

最上級の形容詞、序数詞、last、next、onlyなどの語に修飾される名詞を意味上の主語とする不定詞関係節は非法的意味を表す(Quirk *et al.* (1985: 1269); Geisler (1995: 76-77, 119-123); Huddleston and Pullum (2002: 1068) ; Swan (2016: entry 101)を参照)。例えば、(ia)は、法助動詞を含まない定形関係節を用いて、(ib)のように言い換えることができる。((iii)は類例である。)

(iii) a. He's the oldest athlete ever to win an Olympic gold medal. (=...who has ever won...) (Swan 2016: entry 101)

b. She's the only scientist to have won three Nobel prizes. (*ibid.*)

c. She was the first person to finish the job.

(Huddleston and Pullum 2002: 1068)

d. The only book (ever) to please me is on the table.

(Chomsky and Lasnik 1977: 466)

e. The last person to see him alive is now in the room. (*ibid.*)

ちなみに、Chomsky and Lasnik (1977: 466)は(iiid, e)のような例について、不定詞節が結びついているのは、the only book/the last personではなく、the only/the last である可能性を示唆している。本稿は、(i)・(iii)のような例の非法的意味については論じない。

(iva)も(i)・(iii)と同じく先行詞を意味上の主語とする不定詞関係節の例であるが、(iva)は、(i)・(iii)と異なり、for -ingを用いて(ivb)のように言い換えることができるので、物の使用目的を表す不定詞関係節の例である。

(iv) a. This is the key to open the door.

b. This is the key for opening the door.

6) (ia)の不定詞関係節はcanの意味は表さない。(ia)を(ib, c)に言い換えることはできるが、(i)と(ii)は意味が異なる。(ii)はcanを用いた定形関係節の例である。(i)と(ii)の意味の違いは、(iii)と(iv)の対立として確認できる。(canを含まない定形関係節は言うまでもなく、for -ingもcanの意味は表さないということである)。

- (i) a. The fork is [to eat olives with].
b. The fork is [for eating olives with].
c. This is the fork [that you eat olives with].
- (ii) This is the fork [that you can eat olives with].
- (iii) a. *The fork is [to eat olives with], but it isn't an olive fork.
b. *The fork is [for eating olives with], but it isn't an olive fork.
c. *This is the fork [that you eat olives with], but it isn't an olive fork.
- (iv) This is the fork [that you can eat olives with], but it isn't an olive fork.
- 7) (ia)で示す通り、顕在的関係詞を用いた不定詞関係節は、物の使用目的を表すものでさえもbe動詞に後続できない。この点については本稿では論じない。
- (i) a. *The fork is [with which to eat olives].
b. The fork is [to eat olives with].
- (ii) This is the fork [with which to eat olives].
- 8) Huddleston and Pullum (2002: 1250) は、(ia)において for you を欠くことはできず、また、(iia) のような例は例外的な存在であると述べている。
- (i) a. The decision is for you to make ____.

(Huddleston and Pullum 2002: 1250)

- b. *The decision is to make __. (*ibid.*)
- (ii) a. You are to blame __. (*ibid.*)
- b. *You are to criticize __. (*ibid.*)

Aki (1987: 81)は、(iiia)のような例は非常に有標性の高い表現であると述べ、例えば、(iii)・(iv)で見るように、動詞の選択に制限があることを指摘している。

- (iii) a. The project is for you to carry out. (Aki 1987: 81)
 b. ?The project is for you to discuss. (*ibid.*)
 c. ??The project is for you to finance. (*ibid.*)
- (iv) a. The problem is for you to {settle/?present/*find out about}. (*ibid.*: 86)
 b. This is a problem for you to {settle/present/find out about}. (*ibid.*)

(i)-(iv)の不定詞は全て法的意味を表すと思われるが、本稿では(i)-(iv)の現象については考察しない。しかし、(ia)や(iaa)のような表現が、有標性が高いにせよ存在しているということは、(21)のような表現も決して論理的に意味を成さない

ものではないと思われる点は指摘しておきたい。

9) 変形生成文法においては、法助動詞、to不定詞のto、並びに、定形のbe動詞(および、定形の完了のhaveなど)は、全て文中で同じ位置—時制要素句(tense phrase (=TP))の主要部—を占めるとする分析が支配的である(Chomsky, N. (1981: 20)、Lasnik, H. (1995)、Radford, A. (2016: 80-85)などを参照)。(不定形のbe動詞(および完了のhave)については、Radford, A. (2016: 276-284)を参照。)本稿では、この統語的性質を根拠に、法助動詞、to不定詞のto、および、be動詞に、助動詞という共通の文法範疇を割り当てることにする。

10) 注9を参照。

11) (i)の不定詞節は、(ii)の不定詞節と同じく、法的意味を表す不定詞関係節である。法的不定詞関係節のtoは法助動詞であり、be to不定詞構文のtoは非法助動詞であると仮定すると、(i)のtoと(iii)のtoは異なるtoであるということになる。

(i) the fork [to(=modal) be sterilized]

(ii) the fork [to(=modal) sterilize]

(iii) The fork is [to(=nonmodal) be sterilized].

参考文献

Aki, T. (1987) “On a Derivative Construction: *That is for you to decide*,” *Studies in English Literature English Number* 1987, 79-96.

秋山孝信 (2015) 「不定詞関係節の意味的特性と容認性」『英語語法文法研究』22, 69-84.

Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.

Chomsky, N. and H. Lasnik. (1977) “Filters and Control,” *Linguistic Inquiry* 8, 425-504.

Geisler, C. (1995) *Relative Infinitives in English*. Stockholm: Almqvist & Wilksell.

Huddleston, R. and G. K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lasnik, H. (1995) “Verbal Morphology: *Syntactic Structures* Meets the Minimalist Program,” In: H. Campos and P. Kempchinsky (eds.)

- Evolution and Revolution in Linguistic Theory*, 251-275. Washington, D. C.: Georgetown University Press.
- McCawley, J. (1988) *The Syntactic Phenomena of English*, Vol. 1. Chicago: University of Chicago Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Radford, A. (2016) *Analysing English Sentences*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ross, J. R. (1986) *Infinite Syntax!* Norwood, NJ: Ablex.
- Swan, M. (2016) *Practical English Usage*. 4th edition. Oxford: Oxford University Press.